景観保全と環境ボランティア

芸術工学研究院　環境計画部門
助手　朝廣　和夫

はじめに

「景観 ”Landscape”」とは、 私達が見る周りの事物のこと、「保全 ”Conservation”」とは、価値あるものを保護することをいいます。また、保全は「面倒を見る」、「世話をする」とも解釈され、維持管理する行為を含みます。「景観保全」という言葉は、様々な対象に使用されており、歴史的な寺社仏閣や町並み景観、農林地の里地・里山景観や自然公園の景観などです。これらの景観を保全するには、景観を文化的遺産と自然資源に基づいた持続的な資源として認識し、それを保全する覚悟を持ち、その実現を地道に模索するために、土地所有者、ボランティア、そして行政の協働作業が求められます。

なぜ、景観保全のボランティアが必要なのでしょうか。それを一言で言うならば、著者は「私たちの生活がバランスを欠いているから」だと考えます。地球環境問題に限らず、過疎化の進む田舎、緑や水辺にも事欠く過密な都市、忙しすぎて一緒に休息も取れない家族、偏った食生活。時代とメディアに押し流されて生活している私たちは、振り返ることもなく、一つの方向に走り続けてきました。また、お金にならないモノやコトの多くを置き去りにしてきました。しかしながらその先に、後世に残す持続的な社会を見出すことは困難であり、国の示す限りない進歩が全てを解決してくれるとは楽観できないのです。ボランティアは、「私」という個々人の意思により、少し、バランスを取り戻す生活を模索することです。近くの友人と、地域の人々と、体を動かしできることからはじめること。そのような環境活動の大切さは、今後、さらに重要視されるべきことです。一人一人がボランティアの意識を持ち始めたとき、それは、私たちの環境を支える市民力として大きな力になります。

本稿は、1940 年代頃から景観保全制度を取り入れた英国を事例に、わが国では未発達の景観保全とボランティアの状況についてご紹介し、最後に九州大学の取り組みについて触れることとします。

英国の景観保全の経緯

なだらかな丘陵地の広がりの中に、羊が草を食む牧草地や農地、ちらほらと雑木林や植林地が点在する景観を、英国ではカントリーサイド（田園景観）といいます（写真1）。歴史的に、これらの土地の多くは王室、貴族、そして荘園領主達により所有され、田園景観は生産目的だけでなく狩猟を楽しむ社交の場として維持・管理されてきました。この景観は「ランドスケープ」という美の価値観として西欧に強い影響を及ぼし、大英帝国時代の豊かさの象徴として認識されています。しかしながら、20 世紀、市民社会の到来と

写真 1　ワイ国立自然保護地区、ケント・ダウン特別自然美観地域内

共に多くの大土地所有者は没落しました。館や庭園は荒廃し、土地は切売りされ、近代化農業のために多くの生垣や石垣は取り払われました。

このような景観の荒廃に対し、20 世紀初頭に景観保全活動を支えたのは一般市民でした。産業革命以降、農村から工場労働者として駆り出され、狭隘な都市での生活を余儀なくされた彼らは、田園景観で楽しむ権利を主張し、野生動植物を含めた田園景観の保全を求めたのです。この運動は 1949 年に「国立公園及び田園アクセス法」の施行として実を結んでいます。この法律には、「私有地であっても、自然や田園風景は国民共有の財産であり、それを享受する権利が全ての国民に平等に与えられている」と謳われており、公衆の通行権(Right of Way)を保障しています。網の目のように地図に描かれた自然歩道(Public Footpath)は、土地所有者に気兼ねすることなく、自由に散策することができるのです。

このムーブメントを先んじて支えた活動の一つに、現在 300 万人の会員を有するナショナル・トラスト(以下、N.T.という)という市民団体があります。N.T.は、各方面から寄付や会費を集め、後世に残すべき美しい景観(森、湖、海岸線など)や歴史的価値のある庭園、城、館などを全てまるごと買い上げ保全するという活動を 1895 年から始めました。あのピーターラビットの作者ビアトリクス・ポターも支援者の一人であり、イングランド北西部にある景勝地、湖水地方で書いた絵本の印税で多くの土地を買い上げ、1943 年、死後 N.T.に全て寄贈したことも人々の関心を呼びました。現在、湖水地方の土地は国立公園に指定され(Lake District National Park、図 1、写真 2)、年間 1200 万人が訪れる英国最大の観光地として有名です。

一方、英国に広がる多くの美しい田園景観は、特別自然美観地域(AONB: Area of Outstanding Natural Beauty)という地域指定制度により広く保全が図られています。英国全体ではイングランドとウェールズで 41 地域、2 万 km^2 以上の指定が行われ、国土の 15.6%も占めています(図 1)。著者が訪ねた英国南東部のケント県では、石灰地質の丘陵地域を中心に 878km^2 もの面積が、ケント・ダウン AONB(図 1、写真 1)として指定されていました。AONB は、各地域の景観に応じた管理計画書と行動計画書を策定し、自然景観の保全を第一の目的として運用されます。一部の農林業による開発を除き、土地利用の転換や新しい建築は厳しく規制

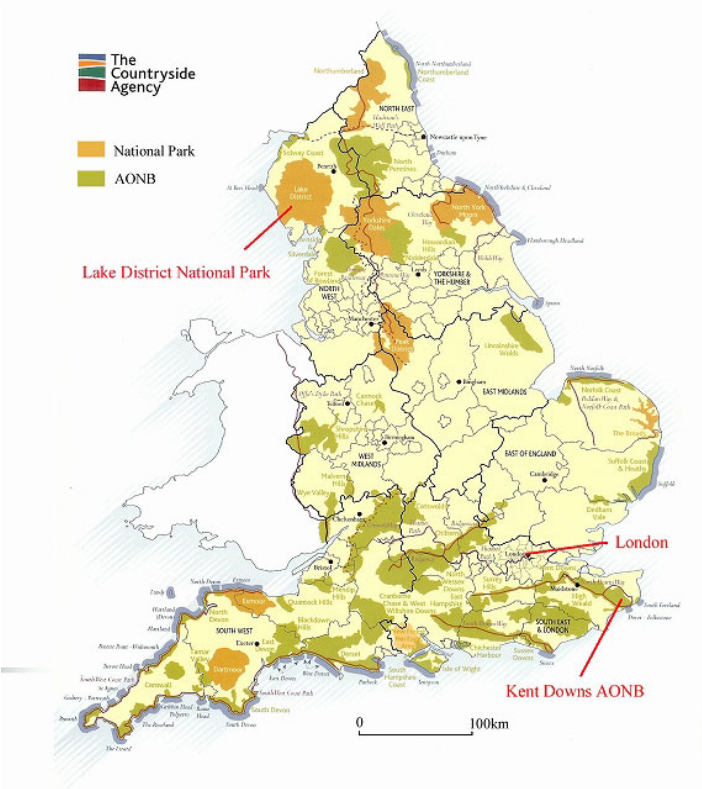

図 1 国立公園(National Park)と特別自然美観地域(AONB)

写真 2 グラスミア湖、レイク・ディストリクト国立公園内

写真 3 ケント・ハイ・ウィールド・プロジェクトの雑木林管理ボランティア活動

写真 4 ハム・ストリート・ウッド国立自然保護地区内の釣鐘草

され、レクリエーションへの利用についても、景観の保全の範囲内で行われています。

さて、このような広い農林地の景観を、どのように保全しているのでしょうか。基本的には、新しい開発に対する厳しい許可制度によるものです。一方、そのような法制度だけでなく、景観保全の実現の多くは、国家機関や自治体による助成制度の運用と、関連ボランティア団体と地域とのパートナーシップにより模索されています。

助成制度と景観保全ボランティア

先に述べたケント・ダウン AONB を所管する Unit と諮問委員会は、管理・行動計画書に記載した景観の問題を解決し、より美しさを強化するために、現在、下記の 5 つの助成制度を運用しています。

・Kent Downs Around Towns.

・Celebrating the Kent Downs.

・ Research Design & Innovation Programme .

・Kent Downs Landscape Initiative .

・Sustainable Development Fund

さて、これらの助成制度を効果的に運用するために、事務局は実践的な保全活動組織と連携しています。組織の類型は主に2種類に分けられ、1つは全国規模の市民団体であり、もう一方は、地域別に構成されるカントリーサイド・プロジェクトと呼ばれる事業体です。

全国規模の市民団体は、先ほどの N.T. を筆頭に、日本の野鳥の会に相当する RSPB(会員数約 100 万人)、ワイルドライフ・トラスト(会員数約 53 万人)、ウッドランド・トラスト(会員数約 12 万人)などがあり、これらの団体は野生生物の保全を視野に入れ、調査、環境教育、保全地の買い取りに力を入れています。日本を代表する日本野鳥の会の会員数が概ね 5 万人弱であるのと比較すると、英国のボランティア団体の規模は圧巻です。また、BTCV(英国自然環境保全ボランティア・トラスト)もユニークな団体です。彼らは、ボランティアリーダーを養成し、AONB や各地の保全地区で実践的なボランティア活動を実施します。例えば、10 日前後のボランティア活動をワーキング・ホリデーというツアーとしてパッケージ化したり、グリーン・ジムという名称で健康をキーワードに作業を組み立てたり、マイノリティーの人々との協働によりコミュニティーの改善を支援したりという具合です。

一方、カントリーサイド・プロジェクトの事務所にも、それぞれ専従のスタッフが数名配置されており、各地で保全活動を展開しています。2004 年 12 月のある寒い曇天の日に、私は雑木林の管理活動に参加しました。2 人のリーダーは 30 代前半の女性で、一人は林学を出てこの職業に付いた、もう一人は庭園で働いていたが、より野性味のある自然の中

で働きたくて転職したと話してくれました。参加者は、パキスタン系の家族7人を含む 16 名。リーダーの指導の元、それぞれのペースで雑木を伐り、楽しく活動を終えていました。明るくなった雑木林の林床には、青色の釣鐘草が一面に咲くようになるそうです。

著者の所感として、英国の景観保全は、基本的に許可制度による厳しい開発規制により守られています。しかし、美しい景観の保全・管理・強化は、管理・行動計画書、各種助成制度、ボランティア活動の密接な連携により、効果的に機能していると思われました。日本の景観地区や他の景観保全に資する指定地区についても、このような協働事業形態の構築が急務であると考えます。

九州大学の活動

本部門の環境保全学研究室を主宰する重松敏則教授は、BTCV や農林家の協力を得ながら、十数年間、日本の各地で 10 日間の保全合宿である国際里山田園保全ワーキングホリデーを実施してきました。一般の都会で生活をしている人々は、中山間地域の農林業や国土環境をイメージすることは難しいものです。この活動では農山村に宿泊し、地元の食材を食べ、農林家や BTCV リーダーの指導を受け、スギ・ヒノキの管理や散策路作り、棚田の石積み修復を行います。(写真5)。

福岡では八女郡黒木町の山村塾が受け入れ先となり、毎回、作業後にアンケート調査を行ってきました。興味深い点として、参加前は「環境保全を実践したい」という動機が多いのですが、参加後は「未知の人々と連帯する喜びを体感できた」という回答がトップを占めます(図2)。これは、合宿型ボランティア活動が、多くの作業を実施できるだけでなく、「楽しみ」や「コミュニケーション」の実現に大きく寄与していると言えます(図2)。

本学では既に、本誌 No.20, p3-5 に紹介された NPO 法人環境創造舎の新キャンパスにおける環境保全活動をはじめ、生物多様性保全ゾーンを拠点とした新しい芽が着々と育ちつつあります。今後、このような景観保全活動を、地域にどのように広めるのか。大学はどのような貢献ができるのかという点について、政策を実現する制度設計と共に、景観保全を主題としたパートナーシップの充実、人材育成が求められています。

写真 5 八女郡黒木町における棚田の石積み修復風景

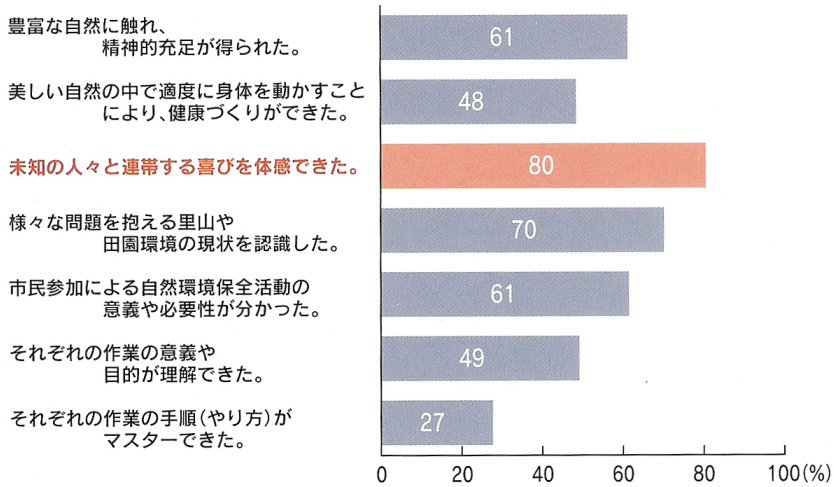

図2 保全合宿を通じて感じたこと(複数回答)、1997～2002年の国内ボランティア123人